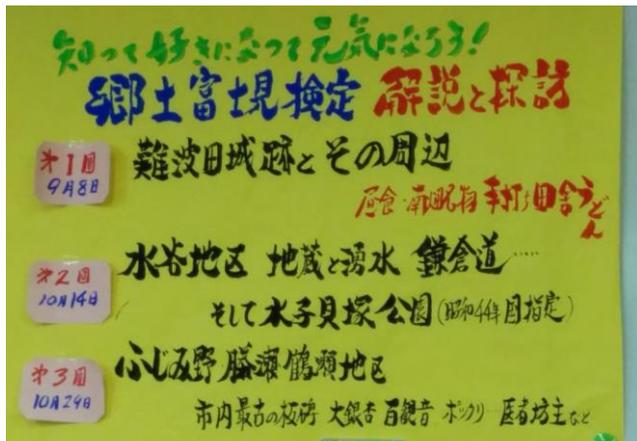


## 38期 第1回「郷土富士見検定」解説と探訪

南畑地区 ～難波田城とその周辺～

日 時 平成27年9月8日(火) 9時30分～15時 (小雨決行)  
集合場所 東武東上線鶴瀬駅東口駅前 9時30分集合  
参加者 12名

9月になって雨の日が続き、当日もあいにくの雨の中、参加していただいた受講生の皆様と鶴瀬駅からびん沼経由で難波田城公園に向かいました。午前中は解説講座の説明を聞き、質疑応答の時間もたっぷり取り、早めの昼食は古民家の“お月見亭”手打ちうどんのランチを楽しみました。雨が強いので、探訪を中止して難波田城資料館の見学、難波田城公園内の説明を受けました。時間をたっぷり取っての見学になり詳しい説明を聞くことができました。帰りは15時36分の富士見市役所行きに遅れないようにバス停に並びました。定刻通りに来た“ふれあい号”に乗り、探訪する予定だった興禅寺、水越門樋、上南畑神社・・・を通りました。探訪ができず残念でしたが、雨の中の楽しい時間が過ごせたとの受講生の感想がありました。



### 38期 第1回「郷土富士見検定」解説と探訪

南畑地区 ～難波田城とその周辺～

市内探訪会は検定問題集で取り上げた市内の主な歴史公園、神社、仏閣、旧跡、会社などを訪ねて、より理解を深めていただくものです。

昼食は難波田城公園内「お月見亭」で地元の季節の食事を楽します。

日 時 平成27年9月8日(火) 9時30分～15時 (小雨決行)  
集合場所 東武東上線鶴瀬駅東口駅前 9時30分集合  
案内担当 富士見市資料館友の会 ふるさと探訪部会  
行 程 鶴瀬駅開設記念碑 → 鶴瀬駅東口バス停・・・ → 難波田城公園 (解説講座会場・園内めぐり・昼食) → 前耕地馬頭観音 → 山形樋管 → 興禅寺 → 水越門樋 → 上南畑神社 → 金蔵院 → (谷合園芸) → 筆子塚 → 旧新河岸川開拓記念碑・南畑橋 → (アキモト畳店) → 大杉講中の碑 → 錫杖権現 → からくり時計塔 (解散)  
約3.5km

バス (ふれあい号) 鶴瀬駅東口発 (老人センター経由) 9時42分  
難波田城公園入口着 10時11分  
解説講座 10時30分～11時40分 <難波田城資料館講座室>  
園内めぐり 11時50分～12時30分  
昼 食 12時40分～ <お月見亭>  
募集定員 20名 (定食申込みのため)  
参加費 ①昼食 1,000円 (税込み)  
②資料・保険料 100円 (受講生は免除)

その他 ①飲み物、雨具は各自ご用意ください。  
②移動中は各自注意し、安全を心掛けてください。  
③行程は変更する場合がありますので、予めご了承ください。

主催 NPO 法人富士見市民大学 郷土富士見検定事務局  
(TEL) 049-251-1140 鶴瀬公民館内

市民大学 郷土富士見検定解説講座

〔南畑地区〕

▲南畑村から富士見市へ

上南畑村は、元は難畑あるいは難波田と書いたが、当村は荒川と新河岸川に挟まれた下流に位置し、しばしば水害に遭うため村民は村名が悪いためであろうとして、安永元年(1772)に南畑に改めたといわれる。

明治2年(1869) 廃藩置県により、幕府直轄領だった上南畑・下南畑・南畑新田の三村は、武蔵知県事の所轄となり、次いで「品川県」となった。大久保村はそのまま「川越藩」の直轄となる。

明治4年(1871) 廃藩置県により、埼玉県・入間県が設置され、川越藩は「川越県」となり、南畑三村とともに「入間県」となる。

明治6年(1873) 「熊谷県」となる。

明治9年(1876) 「埼玉県」となる。

明治12年(1879) 埼玉県入間郡となる。入間郡内に同じ大久保村があったため大久保村を東大久保村と改めた。

明治22年(1889) 南畑三村と東大久保村が合併し、「南畑村」となる。

昭和31年(1956) 南畑・鶴瀬・水谷の三村が合併「富士見村」となる。

昭和39年(1964) 町制施行「富士見町」となる。

昭和47年(1972) 市制施行「富士見市」となる。

平成13年(2001) 上南畑のほ場整備により、上南畑の一部の地名が「みどり野(東・西・南・北)」となる。

以上

知って好きになって元気になろう  
 郷土富士見検定、解説講座と探訪

第4回 郷土富士見検定は  
 12月6日です

津畑地区と難波田城公園とその周辺探訪

2015年

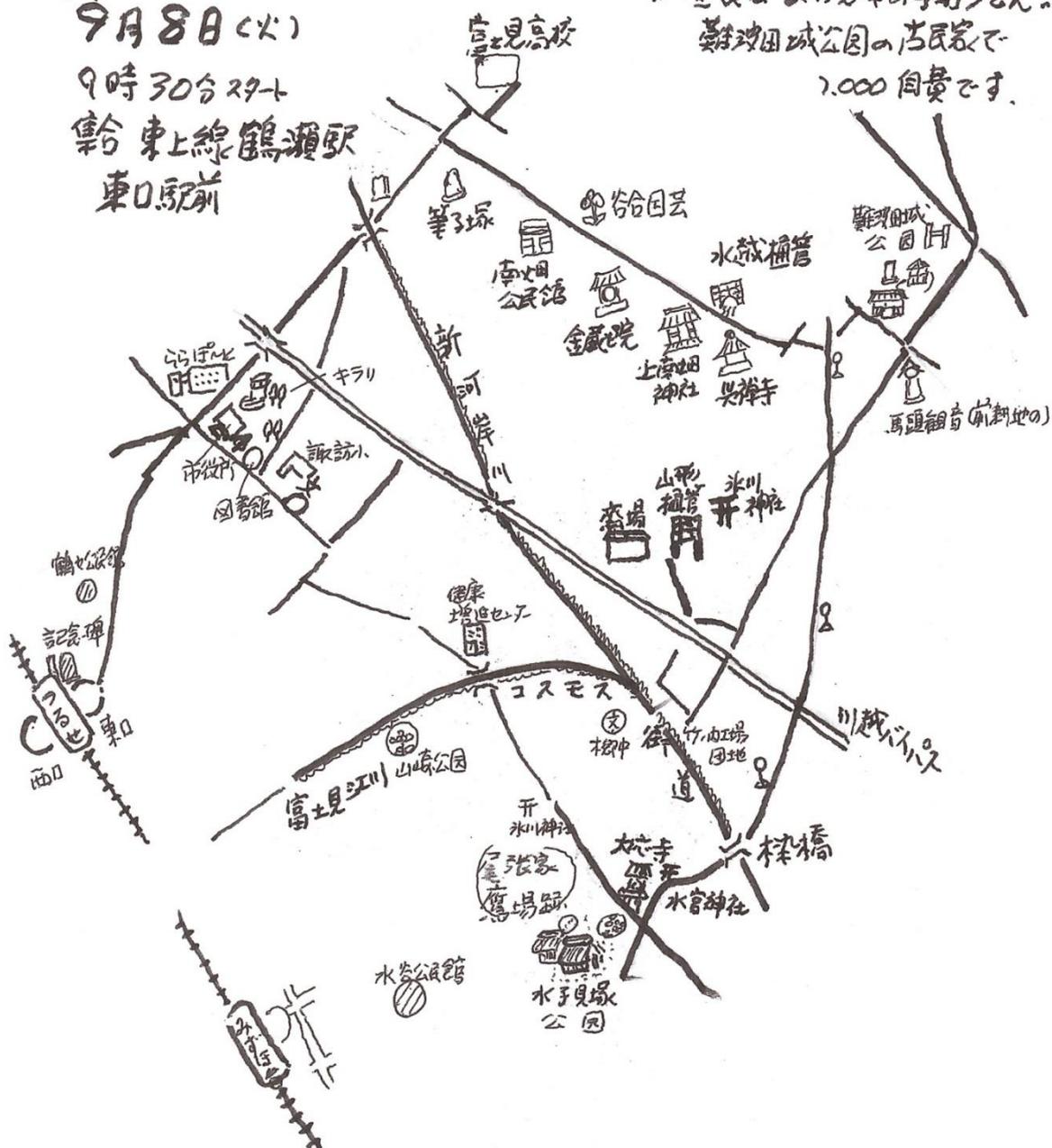
9月8日(火)

9時30分スタート

幹線東上線鶴瀬駅

東口駅前

\* 昼食はよ月見亭の手打ちうどん。  
 難波田城公園の古民家で  
 7,000円です。



\* 当日鶴瀬駅東口の開設記念碑を見学してから、バスに乗場→南畑会場へ

\* 問合せ・鶴瀬公民館 251-1140 市民大学・小山 253-3911

## 第1回の南畑地区

### ◆解説講座

1. 鶴瀬駅開設記念碑 市内には3つの駅があり、駅前には駅の開設やまちづくりのシンボルとしてモニュメント(記念物)があります。鶴瀬駅は大正3年(1914)5月1日、東武鉄道東上線の駅として開設されました。それを記念して駅開設の経緯や開通した日の様子を伝える「鶴瀬駅之碑」と建設者有志、寄付者名・寄付金などが刻まれた「鶴瀬停車場記念碑」があります。2基の記念碑は、駅の上り線最後部線路側(川越方面・市立自転車駐車場裏)にあります。〔総合P125-29 解説〕

### 2. 難波田城公園

①難波田城公園は、難波田城跡を保存、活用することを目的とし3ヵ年かけて整備し、平成12年(2000)6月に開園しました。開園した日を記念して毎年6月に難波田城公園まつりが行われるようになりました。公園内は、城跡を復元した城跡ゾーンと富士見市指定文化財の民家を移築した古民家ゾーンに分かれ、その中央に中世以降の歴史を紹介する難波田城資料館があります。

〔総合P101-79〕

②難波田城跡の全体規模は、50,000 m<sup>2</sup>以上と推定されています。公園の敷地面積はその3分の1である約17,000 m<sup>2</sup>を整備した歴史公園です。敷地中央の難波田城資料館を挟んで、東側が戦国時代の難波田城の姿を復元した「城跡ゾーン」、西側が市内に建てられていた古民家を移築復元した「古民家ゾーン」となっています。

〔1集P143-9〕

③難波田氏は、金子高範(たかのり)を祖先とする一族といわれ、平安時代末期に成立した武士団「武蔵七党」(むさししちとう)の一つ村山党(むらやまとう)に所属する一族で、保元・平治の乱などで活躍しています。高範は鎌倉時代初めの承久(じょうきゅう)3年(1221)、幕府が朝廷と戦った「承久の乱」に幕府側として参戦して、討ち死にしました。その恩賞として「難波田」(現、南畑)の地がその子孫に与えられ、系図では高範の子孫小太郎から「難波田」を名乗ったとされています。そしてその子孫がこの地に居住するようになりました。〔総合P65-10〕

④難波田城は、荒川や新河岸川で運ばれた土砂によってつくられた堤防(自然堤防)の上に築かれた城館です。昭和36年(1961)に埼玉県旧跡に指定された平城(ひらじろ)です。上杉謙信の春日山城などは山城(やまじろ)、市内富士見台中にあった宮崎氏館跡などは丘城(おかじろ)に分類されます。〔総合P103-83〕

⑤観応（かんのう）元年（1350）、室町幕府の将軍足利尊氏（あしかがたかうじ）と弟直義（ただよし）の勢力争い、観応の擾乱（じょうらん）が起きました。尊氏は翌年11月に関東に向けて出兵し、12月に直義軍を駿河国（現静岡県）薩埵山（さつたやま）の合戦でうち破り勝利しました。同年12月19日、尊氏に合流するため府中（東京都府中市）に向かう高麗経澄（こまつねずみ）の軍勢と、それを迎え撃つ直義方の難波田九郎三郎の軍勢が羽根倉橋（はねくらばし）付近（志木市宗岡）で戦い、九郎三郎は敗れて討ち取られました。この合戦を「羽祢蔵（羽根倉）」合戦といいます。〔総合 P65-11〕

⑥難波田弾正善銀（なんばただんじょうぜんぎん）は扇谷上杉氏（おうぎがやつうえすぎし）の重臣として、有力支城の一つである松山城（比企郡吉見町）の城代（城主）をつとめていました。天文14年（1545）、扇谷上杉朝定（ともさだ）は関東管領上杉憲政（かんとくあんれいうえすぎのりまさ）、古河公方足利晴氏（こがくぼうあしかがはるうじ）と結んで、北条氏康の籠もる河越城を約8万の大軍で包囲しました。しかし、翌年（1546）4月20日夜の北条氏康の奇襲によって敗れ、朝定は討ち死にし、善銀も川越市内の東明寺（とうみょうじ）の古井戸に落ちて命を落としたといわれています。この合戦を河越夜戦といいます。これは、桶狭間（おけはざま）の戦・巖島（いつくしま）の戦とあわせて三大奇襲戦といわれています。北条軍の勝利により、難波田城は後北条氏の支城となり、上田周防守（うえだすおうのかみ）が入城しました。〔総合 P65-12〕

⑦室町時代に水子にあった十玉院（じゅうぎょくいん）は、廃絶後東京都清瀬市の芝山に再建され、その後江戸時代に入ると難波田城跡に修験道（しゅげんどう）の寺院である十玉院が移されました。院主は南畑地域を治めていた上田氏の関係者が代々務め、江戸時代には観光冊子であった「江戸名所図会」に紹介され、武蔵国（東京都と埼玉県、神奈川県の一部）で有名な寺院となりました。

明治5年（1872）の修験道廃止令により、十玉院は廃寺となりました。

〔総合 P69-18〕

⑧難波田城公園の城跡ゾーンには、食い違い小口や発掘調査により復元された木橋（本城側が1間、約1.8m、外側が1間半、約2.7mの台形をした橋）、馬出し曲輪（くるわ）など、敵から城を守るための施設が再現されています。〔総合 P103-82〕

⑨下南畑の難波田城公園、西側柵の外に難波田氏の墓もしくは供養塔といわれる中世の石造物があり、五輪塚と呼ばれています。実際には「宝篋印塔（ほうきょういんとう）」の一部が2基残こされています。ここに、戦に敗れた後に、鎧（よろい）などの供養品を埋めたといわれ、人々はこれを掘ると災（わざわ）いがあるといまじめあってきました。時代が変わって、村の者たちの諫（いさ）めも聞かず、ある男

が塚を掘り、その真夜中に、戸の隙間から外を見ると、馬も鎧も血に染めた鎧武者が男に向かって来るのを見て、震えながらお題目を唱えたら消えていったといひます。塔をあばく者があれば「白い馬にまたがった鎧武者が来る」という伝説が残されています。〔総合 P87-53〕

⑩蓮（ハス）はスイレン科の多年草、水田・池・お堀・沼などで長い花柄を水上に抜出て約 60cm に達する紅色・紅紫色・白色などの美しい花をつけます、果実は逆円錐形の花床に埋没して楕円形をしています。和名は蜂巢の略で、果実の入った花床が蜂の巣に似ています。仏教とのかかわりが強く、寺院の池や池沼に多く見られます。難波田城公園の池には行田市より移植した蓮があります。〔総合 P15-21〕

⑪平成 22 年（2010）7 月、開園 10 周年を記念して、難波田城公園活用推進協議会が難波田城公園のイメージキャラクターを一般に募集しました。応募総数は 156 点。最終審査は来園者の投票で行なわれ見事に 1 位には「なんぼった」が選ばれました。〔1 集 P165-16〕

⑫難波田城公園の旧鈴木家表門は、市指定文化財となっており、明治中期に建築された、長屋門形式の門です。鈴木家は針ヶ谷村の名主をつとめました。〔1 集 P143-7〕

⑬難波田城公園に移築された旧金子家住宅は、市指定文化財となっており、明治 4 年（1871）に建築された、約 54 坪の民家です。水子の金子家は、江戸時代末期から明治時代にかけて、農業のかたわら油商を営んでおり、現在も油屋という屋号で呼ばれています。正面西側の出入り口が商家に多い揚げ戸（あげど）になっています。そのためか、土間も広く、かまども目立たない場所にあります。間取りは、田の字型に区切られた 4 部屋で、「四つ間取り」と呼ばれています。〔総合 P101-81〕

⑭難波田城公園内の旧大澤家住宅は、市指定文化財となっており、江戸時代の初めから大久保村の名主をつとめた大澤家の母屋として、明治 4 年（1871）に建てられました。東大久保の大澤家には、今でも市指定の長屋門と穀蔵が残されています。移築された母屋は、かやぶきの木造平屋建てで、建築面積は約 85 坪と大規模で、名主の家の特徴である「式台」といわれる玄関や庭中門、長屋門を持ち、奥座敷の違い棚、付け書院など格式の高さを示す特徴を数多くもっています。〔総合 P101-80〕

⑮天文 6 年（1537）小田原北条氏との合戦で劣勢となった難波田弾正憲重（善銀）が松山城（吉見町）に退却しようとする時、敵方北条の山中主膳は次の和歌で呼び止めました。「あしからじ よかれとてこそ 戦はめ など難波田の浦崩れゆく」（悪しからず良いと思つて戦つたのだろう、なぜ難波の浦の波のように引いていくのだ）、

これに対し難波田氏も歌で返しました。「君をおきて あだし心を我もたば 末の松山 波もこえなん」(幼い主君をおいて自分が死ねば、松山は荒波にのまれてしまうであろう)。これは「松山城歌合戦」といわれ、難波田氏が和歌にもすぐれた武将であったことがうかがえるエピソードです。最近、吉見町商工会はこの歌合戦にひっかけた、ユーモア川柳コンテストを実施しています。〔総合 P67-13〕

⑩昭和 36 年(1961)、当時の南畑出張所(現在いるま野農協南畑支店)の敷地内に立てられた南畑村記念碑には、農業経営の発展をめざし農地の集団化を目的とした、昭和 23 年(1948)~26 年(1951)にわたる農地の「交換分合」の歩みが刻まれています。この取組みは、埼玉県のモデルにもなり耕地整理、農地改革と併せて、まれに見る南畑の農業近代化を推し進めました。やがて昭和 28 年(1953)の東南アジアや昭和 30 年(1955)のアメリカなどからも視察団が訪れ、昭和 41 年(1966)には、旧ソ連のノーベル文学賞受賞作家ミハイル・ショーロホフも訪れました。現在、この記念碑は難波田城公園内に移設されています。〔総合 P119-17〕

⑪皂莢(サイカチ)はマメ科サイカチ属の落葉高木です。別名カワラフジノキと言い本州・四国・九州の山野や河原に自生しています。樹高 15mほどになり、幹や枝には鋭い棘が多数あります。花は雌雄別で初夏 5~6 月に咲き長さ 10cm~20cm ほどの総状花序(藤などと同じ花)、花弁は 4 枚の黄緑色楕円形をしています。秋には長さ 20~30cm の曲がりくねった灰色の豆果をつけて、10 月に熟します。豆果はサイカチという生薬で去痰薬・利尿薬としてもちいられます。サポニンを多く含むため古くから洗剤として使われていました。クヌギやコナラと同様に樹液の漏出がよく起きます。昆虫の好適な餌となり、カブトムシやクワガタがよく集まります。カブトムシを「サイカチムシ」と呼ぶ地域もあり、南畑地域の方言でカブトムシを「せーかち」ともいいます。難波田城公園(南畑)内にもサイカチの木が 1 本あります。〔総合 P11-14〕

⑫「榛(ハン)の木」はカバノキ科の落葉高木で幹は 50~60cm にもなります。この木は非常に湿地に強く排水の悪い所でも成長が早く、主に薪、炭、建築材として使用され、木の皮や実(実)は染料にも用いられました。昔は南畑地区の屋敷をはじめ田畑の周辺・道路・堤防・河川敷など至るところで見られ、農家では丸太や竹竿をかけて稲架けにもしました。今は少なくなりましたが、これが南畑の原風景だったといわれます。〔総合 P11-15〕

⑬富士見市には日本最古とされる嘉吉元年(1441)の月待板碑(市指定有形文化財)があり、難波田城資料館に展示されています。月待板碑は、決まった月齢の夜に集まり月が出るのを待つ信仰の際に建てられます。このように同じ信仰の人々が集まって建てる板碑を結衆板碑(けっしゅういたび)と言います。その他に代表的な民

間信仰の行事として庚申待（こうしんまち）や夜念仏（よねんぶつ）等の信仰もありました。〔総合 P67-16〕

### 3. 前耕地馬頭観音

馬頭観音は馬の守護神として、また、愛馬の冥福を祈って石塔を建立したもので、市内には 81 基あります。この馬頭観音は寛文 12 年(1672)の造立で、市内では 4 番目に古く、江戸初期のものは希少といわれています。大きさは市内最大の 140cm で、市内唯一の三面二臂立像(三つの顔と二本の腕のある立ち姿)です。その他台座部分には下南畑村重玉院を先頭に 7 人の村人の名が刻まれています。

4. 山形樋管・水越門樋 明治期の近代化遺産を代表するものとしてレンガ造りの樋門（ひもん）が南畑地域に 2ヶ所残されています。明治 37 年(1904)に、洪水時、旧新河岸川からの逆流を防ぎ、堤防内の排水を行う目的で造られた「水越門樋（みずこしもんぴ）」（上南畑）と「山形樋管（ひかん）」（下南畑）があり市指定文化財となっています。水路がトンネルのように道路や堤防の下を通り抜ける施設を樋門（ひもん）、樋管（ひかん）、門樋（もんぴ）などと呼びます。〔総合 P81-42〕

6. 興禅寺 下南畑の興禅寺（こうぜんじ）は禅宗の一派で道元を開祖とする曹洞宗のお寺です。本尊の聖観世音菩薩は、室町末期の仏師、春日の作と伝えられています。天文年間（1532～1555）に火災にあい廃寺となり、その後江戸時代に川越渋井の蓮光寺住職によって再建されました。そのときは光禅寺といいましたが、後に現在の興禅寺と改めたといえます。山門前に立つ丸彫りの青面金剛（しょうめんこんごう）像は、人の身の丈ほどで文字が彫られていないという特徴があり、近隣にもあまり例のない庚申塔（こうしんとう）です。〔総合 P95-69〕

元禄 6 年(1693)頃のこと、下南畑の名主であった小山作兵衛は、「古谷、南古谷内（川越市）」近郷の 24 か村と計って、川越領伊佐沼より水を引くことを発議し、自ら惣代となり領主に願い出て、水路を掘る許可を得て着工しました。作兵衛は用水工事のために好物の酒を断って奔走しました。竣工祝いの席で、川越領主松平伊豆守信輝から功労を賞して酒を賜ったところ、彼が大盃を三度飲みほしたのに驚き、「南畑下戸に酒三杯」と称されたと伝えられています。この作兵衛とは、下南畑の小山家の先祖で墓地には、宝永 2 年(1705)に没し、墓石が建立されています。

〔総合 P91-62〕

### 7. 上南畑神社

上南畑村の鎮守で、水越神社ともいい、明治 42 年(1909)に数社の神社を合祀して上南畑神社と改称しました。祭神は天兒屋根命（あまのこやねのみこと）で、天文 18 年(1549)の大洪水のとき、ご神体が流れ着いたのを縁起として祭祀されました。ご

神体は「石棒」とか「青石」といわれています。平成 14 年(2002)6 月、川越の山車などを手がけた彫刻師野本民之助義明が昭和 2 年(1927)の神社改修に合わせて制作した鶴と亀の彫刻が施された額が当時 75 年ぶりに奉納され話題になりました。

8. 金蔵院 上南畑の金蔵院は真言宗智山派に属し、総本山は智積院(ちしゃくいん)です。本尊は如意輪観音です。火災により焼失するが、幾度となく再建を重ねて今日に至ります。かつて、樹齢 500 年以上の大杉の老木があり、「金蔵院の大杉」と広く住民に親しまれてきましたが、昭和 32 年(1957)に本堂屋根の改築のため伐採されました。現在は根株だけが残っています。

江戸時代には寺子屋が開かれましたが、明治 7 年(1874)に本堂を仮校舎として南畑小学校の前身である上南畑村立德明学校が開校されました。

〔総合 P93-67〕

渋谷定輔(1905~1989)は、南畑村(現富士見市)に自作兼小作農家の長男として生まれ、農民運動家・農民詩人として知られています。幼少の頃から農業労働に明け暮れ、17 歳の時小作料軽減要求の農民運動「南畑小作争議」に加わりしました。その後、大正 14 年(1925)12 月に創立された全国組織の「農民自治会」の主力メンバーとして本格的に農民運動を始めました。

厳しい農作業の日々を送りながら、詩を作り、日記を綴りました。

大正 15 年(1926)生活のうっぷんを記した日記から詩集『野良に叫ぶ』が刊行され反響を呼びました。昭和 4 年(1929)には、福岡村(現ふじみ野市)で「火工廠設置反対闘争」に参加し、福岡村の農民と共に陸軍省に土地や耕作権を守るための直訴を行いました。昭和 5 年の時、福島県から家出上京した池田ムメ(渋谷黎子)と結婚し、ともに農民運動を続けました。昭和 45 年(1970)には、書き続けた日記から農民の生活や農民運動を記した『農民哀史』が刊行されました。その他著書には評論集『大地に刻む』、『農民哀史から六十年』などがあります。〔総合 P159-90〕

(谷合園芸) 市内上南畑の園芸農家では、お歳暮やクリスマス用に出荷するシクラメンの手入れ作業は 11 月から年末にかけてピークを迎えます。川越シクラメン研究会の谷合園芸では、大小 10 棟のハウスに赤、白、ピンクの色とりどりの鉢花が並びます。また東京市場、そして市内で直売も行なっています。〔総合 P151-75〕

9. 筆子塚 寺子屋の師(僧侶や修験者)の恩に報いる目的で弟子達が造立したのが筆子塚で、墓石や墓塔の側面に弟子の氏名、筆子中などが彫られています。

市内では 10 基近くの筆子塚が残されています。中でも南畑公民館裏の旧薬師堂墓地の無縫塔(卵塔・蘭塔ともいい、六角または八角の台座の上に卵形をした頭身を載せた石塔)は寺子屋が全国に広まった幕末よりも 200 年も前に開かれ、寺子屋の先駆者といわれ、「お聖人さま(しょうにん)」と慕われた旧東光寺住職



筆子塚

の承覚法印のもので、塔には延宝4年(1676)5月7日とあり、筆子の名を刻んだものとして県内最古であるといわれています。〔総合 P91-63〕

10. 旧新河岸川 開拓記念碑・南畑橋 南畑の旧新河岸川のほとりに廃川となった敷地の土地改良の施工を記念して「旧新河岸川開拓記念碑」が昭和54年(1979)に建てられました。その碑には次のように記されています。「旧新河岸川の歴史は南畑の歴史につながる。かつての新河岸川は蛇行して、水量も多く江戸時代より川越から浅草花川戸に至る重要な舟路であった。(中略) この南畑橋はちょうど上り下りの舟が行きかう地点であり、また船留(ふなどまり)の場でもあった。舟の灯が川面を照らし、夕闇を螢が飛びかい、船頭が大声で言葉をかわし舟歌も聞こえ風情をそえていた。(中略) ここに開拓事業の完成を記念し旧川のほとりに記念碑を建立する。よどみなく流れる新河岸川とともに、この碑が当地の産業開発の歴史を後世に伝えてくれることを念願する」。そして廃川となった面積154,872㎡(東京ドーム約3個分)が農地に変わったことや土地改良区組合員連名として126名の名が刻まれています。〔2集 P25-18〕

大正時代(1912~1926)頃まで、市内の新河岸川に架かる橋は南畑橋だけでした。そのため、主に荷物を積んだ馬車は橋を利用せざるをえなかったが、それ以外は渡し舟を利用しました。市内の渡し場は上流から、蛇木(上南畑)・竹の内(下南畑・水子)・木染(下南畑、水子)山下(水子・下南畑)・乗越(下南畑)5ヶ所にあり、市内の村々を結んでいました。〔総合 P83-45〕

新河岸川の舟運は、大正3年(1914)5月の東上鉄道開通のほか、新河岸川改修工事により水深が浅くなり、関東大震災で舟が焼失して、非常輸送用に徴集されたことにより、衰退していきました。〔総合 P81-44〕

安政6年(1859)頃の新河岸川舟運の船頭居住地は、福岡村(ふじみ野市)21人、南畑村19人と、2村に集中しており、「船頭の村」と呼ばれていました。南畑村は下田地区から蛇木(へびき)にかけて多く、親子や夫婦の船頭もいたといえます。昭和10年(1935)7月、NHKラジオで船頭の秋元氏と押田氏が「新河岸川舟唄」を歌い、好評を博したといわれています。〔総合 P83-46〕

(アキモト畳店) 嘉永5年(1852)創業の畳屋、上南畑地域の(株)アキモトでは、近年、生活様式の変化から「畳」に対する愛着効果について忘れられつつあることを危惧、このままでは畳を知らない子どもが増えてしまう!と、平成21年(2009)より、市内小学校全校に無償で畳を提供しています。子どもの成長過程で畳に座り、寝そべったり、転げまわったりして友だちとのかかわり合いを皮膚感覚で覚えることは大切なことです。また畳の香りは一種のアロマセラピーで精神集中に効果があ

り二酸化炭素の吸収削減もあることも実証されています。(北九州市立大 森田洋准教授) ㈱アキモトでは、3年毎に畳替えし、子どもたちに靴を脱いで上がる。清潔好きな日本人を誇れるようにしたいと、社会貢献、地域還元の一環として行なっています。〔総合 P151-76〕

#### 11. 大杉講中の碑

新河岸川舟運の盛んだった頃、南畑橋の下手には舟泊りがあり、船頭相手の小料理屋が賑わったといひます。大杉講中の碑は大正7年(1918)に、大杉神社(通称あんば様)を信仰する舟運関係者が建てました。石碑には「大杉大神、船玉大神、水神宮」台石には「上南畑村船持連中、大杉講中」と刻まれ、南畑、水谷、川越高階、福岡、勝瀬村などの寄附者51名の名前があります。大杉神社は舟乗りの守り神として信仰されました。

12. 錫杖権現 旧上南畑村と鶴馬村の境で、富士見川越道路(国道254バイパス)そばに錫杖権現(しゃくじょうごんげん)の角塔があります。ここは村の境であったことから災いや悪疫が村に侵入するのを防ぎ、村の安全を祈願して、宝暦(ほうれき)4年(1754)に瑠璃光寺念仏講中(るりこうじねんぶつこうじゅう)である折戸(おりと)地区(旧鶴馬村)の人たちによって造立されました。村人は「しゃくじょうさん」、「しゃくじさん」などと呼んで拝んだといわれています。〔総合 P71-23〕

慶応4年(1868)彰義隊の残党を名乗って下南畑の興禅寺を占拠し、金品を強奪した無頼漢13人がこの地で処刑されたところでもあり、興禅寺には彰義隊残党処刑の供養塔(地蔵尊)があります。

13. からくり時計 中央図書館のからくり時計塔は、中央図書館開館と同時に造られたものです。定刻になると箱が回転して、動物たちが楽しい音楽を演奏します。登場する動物は5匹で、1番上は指揮者のクマ、2番目はタイコをたたくトラ、3番目はバイオリンを弾くキツネ、4番目はハープを奏でるウサギ、5番目はラッパを吹くタヌキです。演奏が終わると、クマを残して4匹が同時に箱に入り、最後に指揮者のクマが挨拶をして箱に入ります。流れる音楽は、からくり時計塔オリジナルで、大人向けと子ども向けの2曲あり、動物たちの動きも変わります。また、動物たちは私たち人間と同じように季節によって衣替えをしています。春用と秋用の2種類ですが、違いに気づいた方はいらっしゃるでしょうか。それぞれの動物の個性をあらわすような、なかなかおしゃれな服装です。〔総合 P123-26〕